
Crescente

高里奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

C r e s c e n t e

【Nコード】

N 0 0 4 7 Y

【作者名】

高里奏

【あらすじ】

オカルト部部长、森嶋宙は魔術の実験をしようとしたところ、武の邪魔が入り失敗。辿り着いた先は魔女の家だった。

序章

もりしまはるか

森嶋宙はその日、いつもの如く、野球部のエース殿から逃げ回り、オカルト部の部室で何やら魔術書を開きながら床に魔法陣を書き込んでいた。

「部長、今日は自宅で新月の儀式を行うので帰らせていただきます」

「ああ、僕はこの本の術式を試してから帰るよ」

正直、宙自身もこんなものは自宅であれば良いとは思っているが、一度見つけてしまったものを中断して帰宅できるほど宙は好奇心を抑えられる人間では無かった。

「それはなんですか？」

「時の魔女とやらと契約する魔法陣らしい。尤も、実在するかも定かじゃないけどね」

佐々木の問いに、宙は顔を上げもせず answers。

実際本に描かれた魔法陣はかなり複雑なもので、宙が今まで描いたどの魔法陣よりも大きなものだった。

「随分大きいですね」

「ああ、佐藤、お前も試すか？」

「いえ、私は。西洋魔術よりは陰陽道に興味があるので」

「だったら僕の鞆の中の本を持っていくといいよ。江戸時代の陰陽師について非常に興味深い一文がある」

「本当ですか？ ありがとうございます」

オカルト部においては部長の書物はみんなのもの。一度読んだ書物をすべて記憶している宙は読み終わった文献を部室まで持つてくる。

部員たちの楽しみの一つはその文献であった。

「これは……部長、お借りしても？」

「ああ。あげるよ。僕には必要ない」

「ありがとうございます」

佐藤は嬉しそうに本を眺め、抱きしめる。

「佐藤は遅くなる前に帰るといい。暗くなると女の子は危ないからね。佐々木、送ってあげなよ」

「はい。って、部長も“女の子”でしょう？」

「生物学上だけの話だ」

そう答えながら、宙は本と図面を見比べる。

「相変わらずですね。部長は」

「僕はこれでいいんだよ。まあ、時の魔女に会えれば、僕はもうここには戻らないよ」

「え？」

「あの野球部エース殿には二度と会いたくないからね」
宙は心底忌々しそうに言う。

「ああ、月見里先輩ですね…」

「部長は本当に月見里先輩が嫌いですよ。結構モテるのに」
野球部のエース殿こと月見里武は宙曰くストーカー。宙はなぜあんな奴に好かれてしまったのだろうと常日頃からぼやいていた。

「良い人だと思いますよ？ 月見里先輩は」

「女子にも男子にも人気ですよ。噂じゃファンクラブまであるのか」

部員たちが言うとう宙は大きくため息を吐く。

「次の生贄はエース殿に決まりだ」

意地悪く笑う宙に、今度は部員たちがため息を吐く番だった。

「ほら、みんなもう帰りなよ」

「部長一人で大丈夫なんですか？」

「僕を誰だと思ってるんだ？」

「我らがオカルト部部长、二年一組だけならず、学校の羨望の的森嶋宙様です」

佐々木が言うと、部、全体から拍手が沸く。

「誰が世辞を言えと言った。僕はそういうのは嫌いだ」

「いいいえ、謙遜なさらずに。部長が素晴らしい方だということはここにいる全員が知っています。もちろんリディ様も」

「……そうか」

少しばかり恥ずかしくなつて宙は俯く。

「ほら、早く帰りなよ」

「はい。それでは失礼します」

佐々木が挨拶をすると、そろそろと部員たちが出ていく。

それを確認して宙は再び魔法陣へと向かった。

「リディ、これが成功したら君の故郷に行けるかもしれない」

「宙、それよりもっと違う世界を見られるかもしれないわ」

宙が話しかける相手、リディは宙の肩の上で楽しそうに宙の手元を見つめていた。

「別の世界か……だったらもつと魔術の発達した世界が良いな」

「うん。宙ならきつと」

宙は微かに微笑む。

「へえ、部長、そうやって笑えたんだ」

「なっ……貴様！何故ここに！」

宙が驚いて見上げると、例の野球部のエース、月見里武やまなしたけるが居た。

「部長と一緒に帰ろうと思って」

「貴様に部長と呼ばれる筋合いはない！」

宙は苛々しながら叫ぶ。

リディは驚いて宙から離れた。

「宙、落ち着いて」

「ごめんよりディ。恐がらなくていいからね。君には怒ってないよ」

宙はリディに手を伸ばす。

「部長？ 誰に話しかけてるんだ？」

「貴様には関係ない」

不思議そうな月見里を、宙は撥ね退ける。

実のところリディは、宙とオカルト部の人間以外には見えない。おそらくそれは信じる心に関係しているのだろうと宙は思ってい

だが、それをわざわざ月見里に教える気にはなれなかった。

「で？ 部長、なにやってんの？」

「貴様には関係ない」

「教えてくれるくらいはいいいんじゃねえの？」

月見里の言葉に、宙は少しばかり見下した視線を送る。

「貴様のその下等な脳では理解できんとは思うが教えてやろう。これは時の魔女を召喚するための魔法陣だ。これにより時の魔女と契約を交わす。利用できるのは新月の夜のみ。つまり、今夜だ」

宙は些か得意げな表情になる。

「で？ 何時に帰るつもりなんだ？ まさか学校に泊まったりとかしねえよな？」

少し怒ったように月見里が言うので、宙は不機嫌になる。

「お前には関係ない」

「いや、関係ある。心配なんだよ。部長がさ」

「心配してくれと頼んだ覚えはない」

そう言って宙はキャンドルに火を点す。

「邪魔だ、出ていけ」

「嫌だね。どうせ部長はまた危険なことをするんだ」

月見里がずかずかと魔法陣の中に入り込む。

「馬鹿！ 止せ！」

宙が叫んだ瞬間だった。

オカルト部部室は真っ青な光に包まれ、次の瞬間二人は真っ黒な空間へと辿り着いた。

第一章

「ったた…リディ、大丈夫かい？」

最初に起き上った宙がリディの姿を探す。

「あれ？ リディ？ どこ？ 居ないのかい？」

リディの姿はない。

桃色のドレスも、栗毛も葉のような翹も見当たらない。

「残念だけど、あなたの妖精は一緒ではないわ」

「誰？」

宙は慌てて声のしたほうを向く。

そこには一人の女が居た。

「私は蘭。人は私を時の魔女と呼ぶわ」

「時の魔女？ ってことは…成功だ。僕はあなたに用が」

「わかってるわ。でも、そっちの彼は違うでしょう？」

そう言われ、宙は慌てて時の魔女の示す方、つまり真後ろを振り向く。

「げ…ついてきたのか…」

宙は心底迷惑そうな表情をした。

「ってえ……ん？ ここ…どこだ？」

「ここはクレッシェンテ。罪なき国。もしくは闇の王の国。かしら」
目が覚めた月見里に静かに告げる時の魔女の言葉に宙は目を見開く。

「闇の王？ まさかあの本…」

確か本には『闇の王の国に時の魔女と繋がる何かがあると考えられる』と記されていたはずだ。

「そう、あなたが…まあいいわ。私は依頼をこなした。先王からの依頼を」

「依頼？」

「あなたをこの国に連れてくること。悪いけど、その後のことは何

も聞かされていないの。だから、あなたは好きにしていいわよ」
そうは言われても、宙はどうしたらいいのか理解できない。

「何故僕がここに呼ばれたんですか？」

「……一種の可能性かしら？ 行き場はあって？」

「いえ……」

時の魔女の言葉に宙は困る。

いきなり異世界に来てしまった。それも文献の中の伝説の地へと。
行き場はない。それに理由もなく連れてこられてしまったようだ。

「つたく、貴様がインク瓶を倒すから術が失敗したんだろうが」

「俺のせいだよ」

「決まってるだろ。僕一人ならこんな失態は犯さなかった」

宙は月見里を睨む。

「あら、術は失敗していないわよ。なかなか優秀な術師が異界にも
居てくれて嬉しいわ」

「本当ですか？」

時の魔女の言葉に宙は目を輝かせ、月見里は少しばかり気に入ら
なさそうな表情をする。

「あんたも手品師なのか？」

「さっきも言ったけど、私は蘭。時の魔女よ」

「拝み屋か？」

「……いいえ、ただの知恵ある女だと思ってくれればそれでいいわ。
この国で一番情報を持っているのは私ですから」

そう、時の魔女は微笑む。

「あの、僕はどうしたら？」

「そうね。とりあえず、行き場がないならしばらくは私の知り合い
のところでお世話になってくださる？ 私はこれからシエスタまで
仕事なの」

「シエスタ？」

「すぐ隣の情熱の国よ。麻薬と人身売買が盛んね。あとは少しばか
りのんびりした国よ」

『人身売買』という言葉に二人は顔をしかめる。

「ここらでは人身売買も？」

「ええ、だから気をつけて頂戴。そっちの彼も。武、だったかしら？」

彼女は月見里を見る。

「なんで俺の名前を？」

「ふふっ、“魔女”ですから」

そう笑う彼女に、彼は納得のいかないという表情をする。

「武、気をつけて頂戴。とくにあなたくらいの年頃の男の子が、デルタに向けてよく売れるのよ」

「へ？」

「それと、宙も。クレッシェンテは売春も盛んよ。うっかり薬漬けにされて売られないように気をつけて頂戴」

その言葉に二人は青くなる。

そして、宙はようやく『罪なき国』の意味を理解する。

「つまり、この国に“犯罪”という概念がない？」

「ええ、この国は、あらゆる国から“犯罪大国”と呼ばれているわ。人気の商売は暗殺と誘拐かしら。まともな商人はあまりいないから買い物をするときはよく交渉することを勧めるわ」

そう言っって時の魔女は部屋の奥へと進んでしまう。

「あの、時の魔女……」

「待って頂戴。今、電話を掛けてくるから」

時の魔女は微笑みを崩さない。

二人は奥へと消える時の魔女の背中を眺めるしかなかった。

「まったく：部長はなんたってそんなへんな術を試そうとしたんだ？」

「貴様の存在を抹消するために決まっているだろうが」

時の魔女のいない部屋で宙は貴様などとは口を利きたくないと言見里に告げる。

「酷でえな」

「フン、貴様のせいでリディを一人にしてみましたじゃないか！」
宙の不機嫌の一番の原因はそれだった。最愛の、唯一の友であるリディが居ない。宙にとってそれは不安以外の何ものでもなかった。「二人とも、喧嘩しないの。今、私の知り合いがこちらに向かっているわ。快く二人を預かってくださるみたい」

ふわふわとした雰囲気を纏った時の魔女は微笑みを絶やさない。そのことに宙は少しばかり驚いていた。

「あんたの知り合いってどんな奴だ？」

「会えばわかるわ。名前はセシリオ・アゲロ。まあ、世間では“恐怖の代名詞”とされているわ」

微笑みながら言う時の魔女に、月見里はびくりと震える。

「なぜ恐怖の代名詞と？」

「ふふっ、世界最強の暗殺者なの。彼は」

時の魔女がそう言った瞬間、戸をたたく音がした。

「蘭、居る？」

戸の向こうから聞こえるのは幼い少女のような声だった。

「あら、玻璃ちゃんも一緒だったの？　いらっしやい。早かったわね」

時の魔女が戸を開けると、中に入ってきたのは十五、六歳程の長い黒髪を編みこんだ、真っ黒な衣装に身を包んだ人形のような少女と、二十代後半くらいの質素なのに上品な雰囲気の民族風な衣装に身を包んだ赤毛の男だった。

「それで？　わざわざ僕を呼んで預けたいという女は誰ですか？」

「あら、二人って言ったじゃない。女の子と男の子よ。宙と武。ほら、二人ともこっちに来て頂戴」

正直、二人はいかにも不機嫌そうその男が恐かったが、時の魔女に言われるままに三人の元へと歩む。

「男は本部に入れるわけにはいきません」

「あら？ どうして？」

「僕の可愛い奥さんに万が一のことがあっては大変ですからね」
大真面目に言う男に時の魔女はくすくすと笑う。

「大丈夫よ。朔夜なら」

「だといいいですね。とにかく。そちらの女性は預かってもいいですが、その男はお断りします」

彼は絶対に認めませんと言う。

その様子に二人は困り果てていた。

「あの…どのあたりが快く引き受けてくださったんですか？」
おそるおそる宙は訊ねる。

月見里と離れられるのは嬉しいが、この男はどう見たって“快く”などとは思っていない。

「マスターが快く蘭の頼みを引き受けるはずがない」

男の隣の少女が何の感情も感じ取れない声で言う。

「えっと、君は？」

「ドリー」

宙の問いに少女は静かに答える。その表情からも何の感情も窺えない。宙は思わず気味が悪いと感じた。

「名乗りたければ名乗っても構いませんよ？」

「ほんと？」

彼女が確かめるように男を見上げると、男は頷く。

「玻璃」

「玻璃ちゃん？」

「……“ちゃん”は要らない」

微かに拗ねたような仕草を見せる玻璃に宙は驚いた。

「人形じゃなかった…」

「好きにして。もう、なんでもいい」

少し拗ねた様子の玻璃に、宙は思わず微笑む。

「ごめん。僕は宙。森嶋宙。気軽に宙って呼んでよ」
「いいの？」

「勿論」

宙が言うと、玻璃は嬉しそうに笑う。

本当に幼い子供を見ているような錯覚に陥る。

「マスター、宙と一緒に？」

「：玻璃、気に入ったのですか？」

「うん」

玻璃が頷くと、彼はため息を吐いてから「仕方ありませんね」と言う。

「そちらの：宙、でしたっけ？ 玻璃の責任で預かるのは構いませんよ」

「ありがとう」

その言葉に宙は驚いた。

まさかこんな自分よりも年下の少女の世話になるなんて。

宙のプライドが微かに折れた気がした。

「言っておきますが、玻璃はあなた方より年上ですよ」

「え？」

「嘘だろ」

どうやら月見里も同じ事を考えていたらしく、驚いたような表情で玻璃を見ている。

「これでも今年二十三なんですよ。もっとも、その化け物とはとくに七百を超えていますよ」

「あら？ 失礼しちゃうわ。あなただって十分化け物じゃない。セシリオ、もう何百年その姿なの？」

どうやらこの国では外見年齢はあてにならないらしいと宙は思った。

「それで、武はどうするの？」

「ウラーノでもスピードでも好きな方に預けなさい。僕は関わりたくありません。特に、貴女からの依頼となると余計にです」

不機嫌を顔に男が言う。

そして彼は玻璃を向く。

「宙を連れて先に帰りなさい。僕は少しこの女と話があります」
彼が言うと、玻璃は黙って頷き宙の手を引いた。

「こっちだよ」

「え？ ああ、時の魔女、世話になりました」

「ふふっ、仕事が片付いたら会いに行くわ」

時の魔女に見送られ、宙は玻璃に手を引かれるまま進んだ。

第二章

宙が連れてこられた場所は、とても薄暗い宿屋のような場所だった。

「宙、私の部屋で良い？」

「あ、ありがとう」

玻璃の部屋と言う場所に通された宙は驚いた。

何も無いのだ。

クローゼットらしきもののほかは、床に毛布とクッションが置いてあるだけ。他にあるとしたらカーテンと壁に飾られた絵だけだった。

「えっと、玻璃、ベッドとか無いの？」

「無いよ。あんまりこの部屋に居ることもないし」

玻璃の言葉に宙は少し納得する。

「普段はね。アラストルのお部屋の長椅子で寝るの」

「アラストル？」

「えっと…保護者？」

玻璃自身も良くわからないと言った風に言う。

「アラストルって凄く温かくてね、遊びに行っても怒らないし、雨の日も遊んでくれるし、寒い日はココアをくれるんだよ」

「へ、へえ…」

正直宙は玻璃にどう対応すれば良いのかわからなかった。

「それに、この前はお仕事くれたの」

「玻璃はどんな仕事をしてるんだ？」

「暗殺者」

そういえばクレッシェンテで一番人気の職業だと時の魔女が言っていた。

「でも、解雇されたから今は凶鑑の蝶や蛾の絵を描く仕事」

「へえ、絵が得意なんだ」

「うん。蝶を描くのが好き。蝶を描くとリリムが喜ぶんだ」

玻璃は人と話すこと自体が少ないのか楽しそうに話す。

「えっと、僕はここに居る間どうしたら良いのかな？」

「ちょっと待ってて、今瑠璃に毛布借りてくる」

そう言って玻璃は部屋を出て行ってしまふ。

玻璃のどこと無く心地よい小さな可愛らしい声が聞こえないのが少しばかり寂しく思える。

「瑠璃って誰だろう？」

玻璃の話は登場人物が唐突に増える上に人物も多くて全く整理できない。

何よりベッドも布団も無いような場所でかなりの間世話にならなくてはいけないと思うと憂鬱だった。

「どうやったら元の世界に帰れるんだ？」

この世界の最大の難点はリディとの意思の疎通が出来ないことだ。もしかしたらこの世界に自分以外に妖精の存在を信じる者が居ないせいで彼女が存在できないのかもしれない。

そう考え、微かに身体を震わせる。

「僕の魔力はどうなるんだろう？」

使えなければ、もうもとの世界には戻れないかもしれない。

日本という国に、あの世界にそれほど未練は無いが、あの世界はとても平和だったと思う。とりあえず法律で殺人や誘拐や人身売買なんかは禁止されていたし、薬物だって取り締まられていた。そんな世界で育った自分がこんな世界で生き延びられるだろうかとは不安に襲われる。

魔女が居る。

ということは魔術自体は使えるはずなのだ。けどもリディが居ない。その事実が不安をより一層大きくした。

「宙」

戻ってきた玻璃の声にびくりとする。

「どうしたんだ？」

「瑠璃が宙に会いたって」

「瑠璃？」

「私だ」

そう言って入ってきたのは玻璃より五センチほど背の高い栗毛の女。

風呂あがりなのか、濡れた髪をタオルで拭きながら入ってきたようだった。

「お前が宙か？」

「はい。森嶋宙です」

そう言うとき女は驚いたように宙を見る。

「へえ、姓があるってことは良いとこの身なんだね」

「え？」

「私たちはみんな捨てられた身だ。マスターの世話になってようやく生きている。マスターも口は悪いけど面倒見はいいんだ。そういうやもう一人ガキが居るって聞いたな。男なら、うちには来ないだろうが、どこかに預けるくらいはするだろうよ。安心しな」

そう、女は豪快に笑う。

どこことなく、“男らしさ”を感じさせるような笑いだった。

「えっと、なんてお呼びしたら？」

「瑠璃、もしくはヴェント」

「ヴェント？ 風、ですか？」

宙は驚き、そして納得する。

確かに風のような人だと感じた。

「ヴェントってのはコードネームだ。玻璃はドーリー、朔夜はレオ
ーネ。マスターは無いけどな。で、瑠璃が日ノ本から持ってきた唯一の名だ。玻璃も一緒だな」

「うん」

「えっと、お二人はどういう関係で？」

そんなことを訊いてもいいのか迷ったが、宙は訊かずにはいられなかった。

「あ？ 姉妹だよ。双子のな」

「え？」

「見えねえか？」

瑠璃の言葉に宙は大きくう頷いた。

「髪の色とか全然違うからな」

そう、瑠璃は笑うが、そういう次元ではないと宙は思った。

「双子は不吉だって捨てられた」

あっさりと言う瑠璃に少し驚いたが、おそらくはセシリオ・アゲロが面倒見の良い人間だということだろう。

「瑠璃は今宮廷からも勧誘が来てるんだよ」

「勧誘？」

「騎士団に入れって話だ。断ったがな」

瑠璃は少しばかり不機嫌そうに言う。

「玻璃は無いの？」

「ないよ。今は大学の教授と一緒に絵を描くお仕事。昨日はね、青い大きな蝶の絵を描いたの。リリムにも見せたかったけど、見せに行っちゃダメって教授に言われちゃった」

少し悲しそうに言う玻璃に笑みが零れた。

「話を聞いていると全然暗殺者に思えないな。二人とも」

「そうか？ まあ、最近は護衛の仕事の方が多いしな。王が崩御したって言うんで、散々恨みを買っていたお偉いさん達が怯えてディアーナやハデスに依頼するんだ」

「月の女神と地下の王？」

「いや、独立暗殺組織だ。ディアーナもハデスも国に仕えているわけではない。かといってどこぞの貴族に仕えているわけでもない。今いるここは、ディアーナのスラム街アジトだ。マスターもここで育ったし、宮廷の奴らはこんな場所に近づきたがらねえ。まあ、戦

えねえ商人とかは少し危険だが、私たちにとってこれほど安全な場所はない」

そう言う瑠璃に宙はついていけなくなる。

「宮廷の人がなんで近づきたがらないんですか？」

「楽に話せよ。宮廷の下っ端はここの連中に怯えてるし、宮廷騎士団長殿は雨が嫌いだね。少しでも曇ってくるとよほどの相手に会わない限り全部部下に任せて帰っちゃまうんだよ」

瑠璃の言い分は、まるで宮廷騎士団長を知り尽くしていると言わんばかりだった。

「ジルは雨が嫌いだから雨の日に遊びに行くと怒るんだよ」

玻璃が退屈そうにあくびをした。

「お前は遊ぶことばかりだな」

「明日アラストルのお家に遊びに行こうと思って」

「…またあいつか…明日は晴れることを祈るよ」

瑠璃は大げさにため息を吐く。

「そんなに雨が多いの？」

「ああ、とくに夏場はな。クレッシェンテは夏が長いんだ。代わりに春が短い。秋は無い」

「へえ、玻璃は雨が嬉しいみたいだけど？」

「まあ、こいつみたいなのも居るって程度に考えとけ。あまり多くは無いがな。あの銀の剣士も雨が好きな変わり者だ」

「銀の剣士？」

宙が訊ねると、瑠璃は本当に忌々しそうに名を口にした。

「アラストル・マングスタだ」

その後、宙は散々アラストルという男についての瑠璃の意見を聞かされ、玻璃のフォローになっっていないフォローを聞かされた。

正直、かなりうんざりしていた。

「ほら、もう遅い。ガキは寝ろ」

「……ガキですか…」

もうそんな歳じゃないと言いたかったが、実際瑠璃は年上だったし、これからかなり長く世話になるであろう相手にそんなことは言えなかった。

「おやすみ、瑠璃」

「ああ、おやすみ。良い夢を見ろよ」

そう、瑠璃は玻璃の頬に軽く口づける。

「宙も良い夢をな」

「瑠璃も、優しい夢を」

そう宙が返すと、瑠璃はくつくつと笑って出て行った。

「玻璃」

「なあに？」

「クレッシェンテではキスが挨拶なのか？」

「さあ？ アラストルはしないけど。マスターも時々朔夜にしてもらってる。瑠璃は朔夜にされそうになると怒るけど？」

一般的ではなくこの組織内の挨拶なのだろうか。そう考えていると玻璃が柔らかい毛布を渡してくれた。

「ありがとう」

「ううん。好きな場所で寝て。私は窓際の壁のところが朝になっても日光が当たらなくて好き」

「だったらその反対側で寝てもいい？」

「うん」

どうやら玻璃とは趣味が合いそうだ。

玻璃の部屋は涼しいし、薄暗くて居心地が良い。

もう、ベッドが無いとかそういうことはどうでもよくなってきた。

「玻璃」

「なあに？」

「なんで床で寝てるの？」

答えは分かっている。

「硬くて涼しい場所が好きだから」

「僕も同じだ」

家では出来ないことを出来る喜びがある。

そして、玻璃も同じだということがとても嬉しく感じられた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0047y/>

Crescente

2011年12月7日23時46分発行